

「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」 新井紀子 著 東洋経済新報社

今回紹介するのは、2018年2月に出版された『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』という本です。以前に数学の関係で、著者の新井紀子氏の講演会を聞くことがあり、また2010年12月に出版された『コンピュータが仕事を奪う』という本を読んでいたことから、今回も読もうと思いました。

本書について述べる前に、以前の『コンピュータが仕事を奪う』で指摘されていたのは、「いずれ必要がなくなってしまう計算力と暗記力」、より一層重要になるのは「論理的に考えなければ達成できないような活動を意識的に設けること」、「説明活動をする事」であるなどが印象に残っていました。

本書は出版されてから、インパクトを与える本として多方面で紹介されてきた本で、大きく2つの部分に分かれています。前半は2011年に始めた「ロボットは東大に入れるか」というプロジェクトについて書かれており、「AIが社会に普及したときにAIに仕事を奪われないために、人間がどのような能力を持たなければならないかを明らかにしたい」という考えから始まり、おおよそセンター試験受験者の上位20%に入るくらいになったことが報告されています。さらに「新しい技術の登場で、仕事が消えるのは今に始まったことではない」ことも詳しく書かれており、インパクトのある記述が続いています。

後半では、「人間はAIにできない仕事ができるか？」について書かれています。上記のプロジェクトを進める中で「文章の意味を理解することが難しい東ロボより得点が低い学生がいるのはどういうことか」という疑問から、「義務教育で教科書の文章を正しく読める力がついていない？」という仮説の下に「基礎的な読解力を科学的に測るリーディングスキルテスト(RST)」を実施した結果が紹介されています。「次代を担う中高生の読解力は危機的な状況にある」とのことで、「基礎的読解力は人生を左右する」と述べられています。では「何が読解力を決定するのか？」について知りたいと思う方は、本書をお読み下さい。